

に片假名のメの字を取て二合したる也。

○もんもう 文盲 蚊魘 長明無名抄 上
「或人云。基俊は後頬をば、蚊魘の人とて、さはい
へども駒の道ゆくにてこそあらめといはれければ」

やノ部

○や屋 凡今平人の家に何屋何某と屋號を
稱する事は、至つて文雅なる事にして、胡論なる稱
號よりはまさり。此事足利家の時よりや始りづら
んか。康富記云「應正二十七年十二月七日春日祭也。
予依爲分配早朝南都下向。天蓋小路龜屋著之。
史員職行等同宿也」又康正元年十一月卅日メシ狀に
「綾小路大宮酒屋」ト云。又此記文中に往々魚屋、鰯
屋など云事見えたり。これより以前の記錄には、い
まだ見當らず。或人の説に、孝德記に鹽屋鮑魚とい
ふ人見えたりと云。然れば、これは鹽屋といふ姓な
る也。かの後世の如き屋號にはあらざるなり。

○やい 今の俗人をよぶにやいといふは、やよ
を急語の音便に訛れる也。古今集、三、夏、三國の
町「やよやまで山ほど、さすことづてん我世中に住

他姓を以て養子とし、家を繼がせたる事は、佐竹家
におこれりと。佐竹氏上杉家より養子にて相續すと
いへり。佐竹家譜に見えたる歌「桃に梅さくらに梨
子はつぐものを竹に木をつく不相應なり。かへし、
ものゝふの取つたへたるあづさ弓竹に木をづき世を
ぞをさむる」と見えたる。

○やうす 様子 輕眞錄、七「司馬溫公家一
僕。三十年止稱君實秀才。蘇子瞻學士來謁。聞而教
之。明日改稱大參相公。公驚問。以實告。公曰好一
僕。被蘇東坡教壞了。言便是様子」

○やうつり粥 今、新家移徙の時、やうつり粥
とて、粥を煮祝ひ、隣家などへも贈る事ならはしと
なれるは、十節云「高辛氏之女。心性甚暴惡。正月
十五日。巷中死。其靈爲惡神於道路憂吟。過路人相
逢即失神。人々令盜火。此人性好粥。故以此祭其靈
無咎害。凡作屋產子移徙。有恠則以粥灑於四方。災
禍自消除矣」

○やうく 源氏物語、朝顔「やうく御おこ
なひをのみし給ふ」同、夢「こと人々のうへは、お

みわびぬとよ」

○やいとう 燒跡のキを音便にて、イにかよはし
アを略して、ウをそへし也。又按に、焼所か。隆信
集、戀、六、「れいならぬこと有て、やいとうなどし
たるに」拾芥抄、下末「灸治穢者七日。居灸之人三日
云々」行阿假字遣「文覺法師が正治二年に、鎌倉の
將軍賴家朝臣に、返り事におくりたりし書にいはく
「あつきやいとうを、ねんじてやかせば、やまひい
え候也」といへる言あり。君とある人の、臣のいさ
めをうけいるべきだとへにいへる語也。今も中國の
邊にて、灸をやいとうといへる。これを見れば、久
しき時よりの詞也。

○やうきゆう 楊弓 二水記云「享祿三年二
月三日午時。參内有三御楊弓」

○やうし むことり 十訓抄、卷十、四丁「高陽
院の姫君と申すは、鳥羽院の御むすめ、美福門院の
御腹なり。此みやの御とりごにて云々」江家次第廿
世ニ丁「執筆」と見え、其外物語等に出たる聲をとる、
よめをとるなどのとるといふもおなじかるべし。或
書云「古へは養子といへども皆同姓を以てす。全く

のづからやう／＼さけど」唐鏡「やう／＼の勝地行
幸して」同「季夫人をいつさすゑて、やう／＼に
もてなされければ」

○やう／＼し 様々ノ音也。様體らしく、勿體
らしき意と聞ゆ。長明無名抄、上「かならず所ざら
ひして、やう／＼しと人にいはれんとおもはるべき
をとなんをしへ侍し」同上「やう／＼しとながめい
でられしかば」同上「あれたるたうのおほきにやう
／＼しきがみえければ」

○やうやく 清 神樂譜、弓「みちのくのか
たちのまゆみわがひかばやうやくよりこしのびく
に」

○やかせ 矢風 曽福好忠集、九月をはり好
忠「ともしすと秋の山べに入人の弓の矢風に紅葉ち
古學の徒は是をひたぶるに俗言とするなれど、中古
よりたびやかたといへる事あれば、館をもしかいふ

べきのゑあるべし。玉露證話七「屋形作りの始は、右大將頼朝卿、相州鎌倉の御所を始とする也。是をまねびて今の大内もおもしろく建てる所は、此格を踏へ作れる也。諸大名の屋敷も重き分は此格より起れり。故に館の號ある也」或説云「大工棟梁某が家に、鎌倉右大將家の屋形の指圖有、疑はしき所もあれども、いかにも古へのさまなるもの也。それらを合せ考るに、古へはさもや有つらんと思ひ量らるゝ事多かり。今も薩摩國の守の館は、屋形殿といひて平家造りのいと狹き構へ也と云。即屋形造にして、かの家は故實を守る所なれば、是右大將家の比のさまでてやあらん」といへり。今是らの説によるに、

屋形とは其旅館の作法を云也。そは古への民屋はあしのまろやなどよめるが、茅葺、藁葺にて、其形丸きが如く、猶さらならぬも、四阿兩下などの類なればや、御舍の形なるを屋形と云けん。さればお館様など云も、ひが事にはあらじ。旅やかたは、旅宿也。やかたは、ふるくに、舟と車とにのみいへる詞なるを、後には轉じて、たゞの家居をもいへり。月詣集卷三、民部卿成範「霜がれの草引むすぶ旅やかたし

ぐれまるよはふしそわづらふ」玉葉に、慈鎮「雨はれぬ旅のやかたに日數へて都戀しき夕ぐれの空」此外夫木抄に、季經卿、懷綱など旅やかたとよめたり。

○やかまし 物の囂しきをやかましと云は、彌蓄しきの略語なるべし。新撰字鏡下に「蓄疾言也。加万志」とあり。又物語書等にある加滿といへるあると、今の彌を對へても、おのづからしかおぼしきなり。

○やかましい 古今集、誹諧歌、僧正遍昭「秋の野になまめさたてる女郎花あなかしがまし花もひとゝき」

○やから 「うから」を見よ。

○やきごめ 焼米 落窓物語、一の上「紙隔て焼米入て、こゝにてだにあやしくあはたゞしき口つきなれば云々」落窓物語「此やいごめは露といふらん云々」

○やく 役 後拾遺集、春、上、和泉式部「秋までの命はしらずはるの野にはざのふるえをやくとやくかな」同、戀、四、さがみ「やくとのみ枕の下

にしほたれて煙たえせぬとこのうらかな」續千載集雜中、紫式部「よもの海に鹽くむあまのこゝろからやくとはかゝる歎きをやつむ」新拾遺集、戀、二、和泉式部「よさの海のあまのしわざとみし物をさも我やくと鹽たる、かな」夫木、廿五、經信「袖の浦はたゞ我やくと鹽たれて船ながしたるあまとこそなれ」源氏物語、すま「鹽たる、ことをやくにて松しまに年ふるあまも歎きをぞつむ」二條大貳集「いつとなくあまのかるもの思ひわび我やくかほにしほたる、かな」和泉式部集「もしほ草やくとかきつむあまならば所おほかるふみの浦かな」これら皆、役に焼くをかけたり。

○やくおとし 今ぬす人にものをとられ、又

途中にて物おとしなどしたる事ある時、厄おとしと思ひあきらめんと云。滑稽雜談云「今世の俗、厄年にあたる前年、節分厄落しとて、みづから秘藏の衣服或は器物等を持出て、山野或は街衢又橋上などに捨て、是を厄落しと稱す。按に、祓除の法に、形代など云儀に似かよひたる歎」

○やくどし 厄年也。空穂物語、樓上、下巻に「左

大臣どの、やくどしにおはするとて、大饗せられるのは云々」源氏、薄雲に「卅七にておはしましける云々。つゝしませたまふべき御年なるに」又若菜ノ下に「ことしは卅七にぞ成たまふ云々。さるべき御いのりなど、つねにとりわきて、ことしはつゝしみ給へ云々」繁花物語、かゝやく藤壺に「ことしそ十三にならせたまひける云々。ことしは、人のつゝしむべきとしにもあり」俗間、男の四十二歳を厄といふ。靈樞云「黃帝曰。得其形、不得其色，何如？」岐伯曰。形勝色。色勝形者。至其勝時。年加。感則病行。失則憂矣。形色相得者。富貴大樂。黃帝曰。其形色相勝之時。年加可知乎。岐伯曰。凡年忌下上之人。大忌常加。七歳。十六歳。二十五歳。三十四歳。四十三歳。五十二歳。六十一歳。皆人之大忌。不可不自安也。感則病行。失則憂矣。當此之時無爲姦事。水鏡云「三十三をすぎがたく、相人なども申あひしかば、岡寺は厄を轉じ給ふとくにこそ、今まで世には侍れ」性靈集にも、祈誓弘

仁天皇御厄、表見えたれば、本朝にても、ひさしくいひ來りし事なり。もろこしにては、大忌のとしといひ、我朝にては、厄年と唱ふるなり。水鏡に、三十三をすががたく、とあるは、三十四歳の前年なる故也。世俗四十二をいめるも、四十三歳の前年なる故なりとぞ。

○やくばらひ 厄 宗長手記大永六年十二月廿五日節分云「京には役おとしとて、年の數錢をつゝみて、乞食の夜行におとしてとらする事をおもひて「かぞふれば我が八十の雜事錢 やくとていかにおとしやるべき」笈瑛隨筆卷三四「節分の夜、乞丐の者、暮比より厄ばらひ厄落しとて、町々を走りめぐれば、毎家にその夜の打豆に、己が年の數ほど算へ、錢一穴を入れ、紙に捺りてあたふれば、其年の壽命長久繁榮ことぶきて、結句にいかなる惡魔外道も、此厄ばらひが背負て、唐日本の國境ちくらが沖へさらり、こつかこうと云此難のまねする事は、舊き年も終り、立春の日を告る意にして、その年内の惡事も年も俱に盡て、新にめでたく春をむかふる祝言するなり」日本歲時記七云「世俗に立春の前夜、乞人家々に行て厄

○やくばらひ 厄 宗長手記大永六年十二月廿五日節分云「京

には役おとしとて、年の數錢をつゝみて、乞食の夜行におとしてとらする事をおもひて「かぞふれば我が八十の雜事錢 やくとていかにおとしやるべき」笈瑛隨筆卷三四「節分の夜、乞丐の者、暮比より厄ばらひ厄落しとて、町々を走りめぐれば、毎家にその夜の打豆に、己が年の數ほど算へ、錢一穴を入れ、紙に捺りてあたふれば、其年の壽命長久繁榮ことぶきて、結句にいかなる惡魔外道も、此厄ばらひが背負て、唐日本の國境ちくらが沖へさらり、こつかこうと云此難のまねする事は、舊き年も終り、立春の日を告る意にして、その年内の惡事も年も俱に盡て、新にめでたく春をむかふる祝言するなり」日本歲時記七云「世俗に立春の前夜、乞人家々に行て厄

○やくばらひ 厄 宗長手記大永六年十二月廿五日節分云「京

には役おとしとて、年の數錢をつゝみて、乞食の夜行におとしてとらする事をおもひて「かぞふれば我

ふれば、祝詞をのべ、をはりに雞の鳴まねをする。京都武城に殊に多し、鄙にもする所多し」塵塚談、四「厄ばらひ、三非人節分の夜、御厄ばらひ御厄はらひましよとさけひ、武家町家を歩行する事、今昔かはりなし。文化元子年比より、大晦日、正月六日十三日夜にも除夜のごとくに出来り。しかし節分のごとく大せいはきたらず」

○やくびやう おこり 痘瘍をやくびやうと云るは、役病を字音に唱へ習へる也。古事記、中卷崇神段に「此天皇之御世役病多起。人民死爲盡云々」和名抄に「疫衣夜美。一云。度岐乃介。說文云。民皆病也」また「瘧俗云。衣夜美。一云。和良波夜美」などあり。役は延とも延陀知とも云て、鬼氣時氣に觸て、役らるゝが如く病故の名也。漢國にても釋名に「疫役也。言有鬼行役也」といへる、おのづから言も意も合る也。彼に效へるにはあらず瘧をえやみといふも、役るゝ意の同じかれば也。わらはやみといふは、童に多き病なるより云歟。おこりを動ふといふよりみれば、慄よし歟。おこりと

いふは、起りさめのする故なるべし。

○やぐら 大和物語「宗貞の少將、ものへゆく道に五條わたりにて、雨いたう降ければ、あれたら門に立かれて、見いるれば、五間ばかりなるひだ屋のしもに、つち屋ぐらなどあれど、ことに入など見えず云々」

○やごばえ 木竹の孫枝の生茂るを、田舎人のやごばえといふなるは、彌木生の上略にて、古言の遺れる也。春日祭詞に「天皇我朝廷爾伊加志夜久波、叙能如久仕奉利佐加叙志米賜登稱辭竟奉良久登白」とある此夜久波叙と同じ。

○やさかむ 「かじける」を見よ。

○やさし 優 菊花物語・はつ花「いと」しいういたはしうやさしげにあつかひきこえさせ給ふ

散木集九月十三夜於前武衛泉亭詠和歌序「やさしきのみかあり」山家集「弓張の月にはづれてみしかげのやさしかりしはいつかわすれん」

○やさへ 乏 江次第抄「三之者矢佐戸」

○やしき 屋敷 今世に屋敷といふもの、雅言にいへど、ころといへる、是にあたれり。萬葉集、

九十八に「浦島子之家所と」見ゆ。

○やしま 肥前國唐崎の海濱さしの崎といふ所の人、釜の事をやしまといへり。竹取物語に「あつまりてとくおろさんとて、つなをひき過して、つなたゆるときにやしまのかなへの上に、のけざまにおち給へり云々」文德實錄「齊衡二年十二月丙子朔大炊寮大八島竈神」とあるをいかなる稱名よとおもひつるに、かの人の詞と、竹取とに合せて、大釜の事なるを知れり。三代實錄、延喜式等に、造酒甕を大とちの神とあると同例なり。色葉和難集云「釜をばやしまといふ也。大嘗會行幸にも、釜のわたるを八島のわたると云々」

○やしやご 一 やしは子を訛れる也。和名抄云「爾雅云。曾孫之子爲玄孫。和名夜之波古」とあり。言の心は、彌末子の謂歟。應神天皇の大御歌に、末土

○やすみする 藤原爲忠朝集「太山には雪こ臣「いまのよや弓のこゝろもあらはれてはなつやすちのちかはざるらん」

そはやくつもるらしみほの袖人多やすみする
○やすり のこざり 新撰字鏡に「錯雜也」

摩也。鑑也。己須利。又也須利。又乃保支利」また

「鑑乃保支利」また「鐵乃保支利」

○やせる 寛平御時后宮歌合「あかすして君を

戀つる涙にぞうきみしづみ、やせわたりける」

○やたて 矢立 太平記、二「俊基朝臣誅せ

らるゝ事中略俊基いと涙にくれて、よみかね給へる
けしき、見る人袖をぬらさぬはなかりけり。硯やあるとの給へば、やたてを御前にさしあければ、硯の中なる小刀にて、髪の髪を少しおし切て、北方の文に卷そへ引返し、一筆書て、助光が手に渡し給へば、助光ふところに入て、なきしづみたる有様、ことわりにも過てあはれなり」同六「赤坂合戦之事附人見本間ぬけ駆の事、人見世にも無興げにて、本堂の方へ行けるを、本間あやしみおもひて、人をつけ見て見せければ、矢立取出し石の鳥居に何事かはしらず一首首づけて、おのがやどへそかへりける」

○やつ かやつ こやつ こいつ きやつ あやつ そやつ 奴にて人を惡みていふ詞な

り。竹取物語「かぐやひめてふおほぬす人のやつが人をこころさんとするなりけり」古事記上巻に「於高天原。冰橡多迦斯理而居。是奴也云々」枕冊子に、田植る女の謡へる歌に「郭公よ、意禮よ、加夜都よ意禮鳴てぞ、我は田に立」傳云「枕冊子の加夜都是奴を評伊都と云、彼奴を伎夜都とも阿伊都とも云なり。又杼伊都と云は、誰奴也。これら皆夜を伊と訛り云格の同きにても、是奴は許夜都なる事明らけし。對馬などにては今も阿夜都、許夜都、曾夜都と云といへり云々」

○やつがれ 「せつしや」を見よ。

○やつこ やつこ豆腐 倆言に、やつこと云は、やつこの三言を拗音に云ひなせるなり。古事記傳七八十國造の下云「夜都古といへば甚賤き者の如く聞ゆれども、本然に非す。君に對へて臣を云名なり故君臣の意なる臣をば、書紀などにも皆ヤツコと訓り。又官奴を美夜都古と云は別なり。其はもと私家の奴婢より起て、公の奴婢を云なり。されど、その

ことなることなくて、あまになれる人ありけり。かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけん云々」今すがたをやつすといふ類は是と同じ。俳優のやさ男をやつし役といふは轉じたるいひやう也。又曰く、やつすはやつるゝともいひて、物のおとろへ廢る事をいふ。人の形容のおとろふるを、やつるゝといふが如し。また人に忍ぶ事あるに形をかへ、さまをやつすなどいふも、あらぬさまにかはる方よりいふ。芝居の役者の美少年をやつし役といふは、是とく方よりいふなれば、つひにおなじこと也。後拾遺集序、藤原通俊「この中にみづからにつたなきことは、いたくかはるやうなれども、それも戀にやつるの關のはやかりながら、所々のせたる事あり。この集もて、やつす中だちとなんなるべき」

○やつばら 竹取物語「おそく來るやつばらをまたじとの給ひて」同「かぐや姫てふ大ぬすびどのやつが」古本今昔、盜人「かへるやつは、かくつはきそ」源氏物語、手習「ことにもあらぬやつといふさま、いとなれたり」今昔物語、十九廿五「此搦メタ

ル盜人ノ奴が」太秦牛祭々文に「無儀乃奴原仁於天波」
○やつる、やつれる 忠見集右「こゆるぎのいそ、あまいさりす「こゆるぎのあまはあさりにやづれつゝいかなる時になまめかるらん」堀川院御時百首、藤原顯仲朝臣「あらてくむ賤が垣根の時鳥なげどもなれる聲はやつれす」金葉集、夏、大納言經信「しづのめが蘆火たく屋もうの花のさきしかればやつれざりけり」落窓物語、一下「君のなりはて給はん様林も見んとて云々」

○やつれすがた 林葉「柴の庵を何のぞくらん女郎花たびの日數のやつれすがたを」
○やつれる 「やつる」を見よ。

○やけばつくひ 和名抄云「燼」左傳注云「燼」
晋和名毛江久比。火餘木也」今やけばつくひといふ
燒朴杙のよしなり。

○やとせご 八ツになる子也。萬葉集、九、長歌「あしのやのうなゐをとめが、やとせごのかたなりの時ゆ云々」萬葉集、十三「歳の八とせをきる髪の云々」

○やとふ 屋 寛平御時后宮歌合「霜がれの枝となわびそ白雪を花にやとひてみれどもあかず」

古今六帖、二、小大君「うちやまのもみちのいろをやとふかなをぐらのもりのおばつかなさに」

○やどもり 宿守 源氏物語、松風「やどりのやうにてある人を」同あづかりともいへり。夫木抄、卅六「二所詣下向後侍ども見えざりしかばよ

める、鎌倉右大臣「旅を行しあとのやどもりおのくにわたくしあれやけさはいまこぬ」

○やなぎだる 「たる」を見よ。

○やに ひこしろふ 夫木抄、六、春「いなへらばいひもはなたでもちつゝじやにかけたるはひこじろへとや」

○やね 屋根 萬葉集、四四十に「板蓋乃黒木能屋根」

○やねぶね やかた船 和名抄云「蓬庫」唐韻云「蓬庫」和名布奈夜加太。舟上屋也」釋名云「舟上屋謂之處」言象廬舍也」とあり。されば古くは館をやかたといふやうの事はあらず。船の上屋の廬舍形の如くなるをいひて、船に限る言なりき。

○やぶさめ 流鏑馬 繢世繼、かりがね「白河の院のやぶさめといふこと御らんじけるに」台記

「久安二年九月廿二日少時。法皇皇后幸城南寺祭。如常無競馬。有流鏑馬。事畢上皇還御云云」明月記「承元二年五月九日番本童岑王流鏑矢不中的。即逐一番秀能。二番賢王丸。三番左衛門尉藤原助清。四番左衛門尉源康景。五番右衛門尉藤遠綱。六番源康重。七番源本」北條九代記「弓矢評論條」「嘉禎三年七月下旬に、來月鶴岡八幡宮放生會の流鏑馬の議

○やのむね うはふき 夫木抄、十八、冬、前大納言隆家卿「ますらをがはにふのこやのむねよわみいくへになりぬ雪のうはふき」
○やはす 又ある物をやはすと云は、矢筈のよしなるべし。筈は弓に多くいひならへり。和名抄に「釋名云。弓末曰「彌。和名由美波數」とあり。神代紀に「弓彌」神武紀に「皇弓彌」などあり。波受は弓末端に在て、角又骨などを以て造れる物なり。萬葉集、十六三十に「吾爪者御弓之弓波受」又一八に「梓弓之奈留彌乃音爲奈利」二三〇に「取持流弓波受乃驟云々」箭の筈も准ふべし。

○やはらか 「あまい」を見よ。

○やぶ 蔽 古今集、雜、上、ふるのいまみ

ち「日のひかりやぶしわかねばいそのかみぶりにしさとに花も咲けり」

○やぶいり 敷入 或云「我朝俗。婦女爲官者。謂歲一再歸寧。曰敷入」唐書云「上元二年。詔婦人爲官者。歲一見其親」又溫大雅傳云「火禁中野狐落。野狐落者。宮人所居也。婦女昔比野狐。是可教入之証也」今按るに、和名類聚錄「敷

「敷入」或云「我朝俗。婦女爲官者。謂歲一再歸寧。曰敷入」唐書云「上元二年。詔婦人爲官者。歲一見其親」又溫大雅傳云「火禁中野狐落。野狐落者。宮人所居也。婦女昔比野狐。是可教入之証也」今按るに、和名類聚錄「敷

定あり。五郎時頼初て射らるべきに定められ、鶴岡の馬場に於て、稽古の事を催し、泰時すでに、流鏑馬屋に出給へば、駿河前司以下の宿老參集せらる。馬左衛門尉幸氏は、舊勞にて、故質堪能の射手也仰に依て射藝の事を計らひ申。時頼殿は、生得の堪能、その體神妙の由と感申、但し矢を挾むの時に、弓を一文字に持給ふ事其説なきには候へども、故右大將家の御前にして、弓箭談義の時、一文字に弓を持事、諸人一同の義たりし所に、佐藤兵衛尉憲清入道西行法師申けるは、弓は拳より抑立て引べきやうに持べし。流鏑馬に、矢をはさむの時、一文字に持は失禮なりと申き。一文字に持候へば、弓を挽體いさゝか遅く見え候。上を少し揚られ、水走にかけて射たるぞ然るべけれど申さる。下河邊行平、工藤景光、和田義盛、望月重隆、藤澤清親、諏訪六郎盛隆、愛甲三郎季隆等皆以て甘心承伏して、異義に及ばず是計は五郎殿にも直され候らばやと申ければ、三浦義村打聞て、誠に此説を聞いて候を、只今の仰せに付て、思ひ出て面白く候とぞ感せられける。泰時入興あり。向後の弓の持様は、此故實を守るべき也とて

此後種々弓箭の事、流鏑馬笠懸以下□□作物の故實的草鹿等の才覺、大略淵源をきはめ、燭を秉ほとに各退散せられけり」安多武久路上「やぶさめの事、古書には、やばさめと記してあり。抑流鏑馬は我朝神事第一の騎射也。去ながら此藝の式は大儀なるれば、公家武家ともに、さうなく執行成がたき事なれば、鎌倉右幕府の後は絶て、今は神社の執行となりて、社家人又は士民のわざの様に成來りし也。既に東鑑に、諏訪大夫盛澄、秀郷朝臣の秘訣を受傳へたりしと有也。壽僧云、惣て流鏑馬の射藝には、秘軍家の後は絶たりしを、室町將軍家に及て、柳營なげき思召て、此射藝の古風を再び古にかへし習ふべき由上意有し時、武田殿の御返答には、流鏑馬の式斷絶して、二百年來に及びしなれば、當時其式をなさんはかたき事の旨御答有云々」此書は永祿比の筆也。

名物考云、「享保の比より又御再興の思召ありて、元文二年二月御孫君御誕生の御祈として高田馬場において御興行ありき。穴八幡宮への御法樂とぞきこえし」

○藪にも香の物 是は漢土三國の取合の時、司馬達が詞に「野夫功あるもの、豈大丈夫といふ耳哉」といへり。此語より出たるならんと、武備志三十二卷にいへり。今按に、劉長卿が詩にも「韓信何忍意忽懷野夫功」などあれば、さる事なるべし。此詩は、全篇唐詩評林七八十に出たり。

○やぶれ某 罷る詞也。空穂物語、藏開「なぞのやぶれ子もちか、ものはみるとて引する奉りて」これは子もちの君を罵りていへるなり。

○やぶれづいの犬はしり やぶれづいのいぬはしりふまむしゆらへ思へ秋の野のやぶの住かはながき宿かは」

○やぶれても小袖 必加於首」 梢染傳云「朝服雖々必加於上。弁冕雖々舊」

○やぶるし 蔽醫師 或云「くすしのつたなくわびたるを、藪といふは、藥種かひもとむる事なりがたき故に、藪のあたりをたづねて、あけび、す

いかづら、せうがひげやうのもの取あつめ、藥となして病人にあたふる故ならむ」隨筆「庭訓往來云「雖相尋醫骨之仁」候。藪醫師は間見來候歟」(此説をもつて見れば、久しく云來りしや)古今醫統云「擊鼓舞超、祈禱疾病。曰ニ巫醫是則巫祝之徒。不知ニ醫藥之理者也。故南人謂之巫醫者此也」(以ニ巫醫醫故曰巫醫也)。これ醫にて巫を兼る也。田舎にま、これあり)此説をもつて見れば、野巫醫ともいふべし。(或云「倭俗稱庸醫爲巫醫」者。藪者草莽之謂。猶言野醫也)又俗に、藪畔といふは、人の往来せぬ所をいふ。紹巴述懷千句に「あたりは野路の畔の藪原」

○やま 山 比叡山延暦寺をいふ。古今離別云。飼齒於曾波。齒重生也」とあり。書紀には「於之波」といへり。今八重齒と云も、重生する故に云なり。

○やま 八重齒 和名抄云「飼齒」。蒼韻篇云。飼齒於曾波。齒重生也」とあり。書紀には「於

葉集、戀下「山の歌合に よみ人しらす」

○やまし

謀計もて事を度る者を山師といふ。

こは山の植木を買ふ人の作行より出たる詞なるべし。そは廣き山の事なれば、其木の數も數へがたくあながち里數を度るにもあらず。たゞ凡の見こみにまかせてものする。是をも山師といへばなり。さて彼の山絹にた山などいふにも、少しよしありげなれど、それとは同じかるまじき事、その部とも合せ考ふべし。

○やまと 八的 小右記「寛弘二年五月十四

日辛酉。早旦。資平自左府來云。昨出馬場。左右

近騎射。各三人。又三兵。次令馳廄馬。次令射八

的」

○やまとのうた

「もろこしのし」を見よ。

○やまひぎやうさん 病仰山 空穗祭の使の巻に

「あやしくも、やまひだかしくなりにたるかな」といへるは、俗に病仰山といふに同じ。

○やまひは口より入る

禮記云「小人溺於水。君子溺於口」。君子は貴人なり。國語云「厚味寃脂

毒」朱子感興詩「厚味紛朶頤」

○やまと

「もろこしのし」を見よ。

○やまひぎやうさん 病仰山 空穗祭の使の巻に

「あやしくも、やまひだかしくなりにたるかな」といへるは、俗に病仰山といふに同じ。

○やまひは口より入る

禮記云「小人溺於水。君子溺於口」。君子は貴人なり。國語云「厚味寃脂

毒」朱子感興詩「厚味紛朶頤」

○やまぶし 山伏 僧也。拾遺集、雜下、健守法師「山ぶしのぶしもかくてこゝろみついま」とねりのねやぞゆかしき」後撰集、雜一、素性法師

「このみゆきとせかへても見てしがなかゝる山ぶしことにあふべく」堀川院御時百首、僧都永縁「山

ぶしの苦の衣のうすれば冬になりぬるけふぞかなしき」後撰集、雜二、よみ人しらす「いづれをか雨ともわからん山ぶしのおつるなみだもふりにこそふれ」増鏡、春別「資朝も山伏のまねして、柿の衣にあやむ笠といふものきて」源氏物語、薄雲「なにとわくまじき山ぶしなどまで」東鑑、十三十六「毎夜夢中山臥數十人 群集子重成枕上乞件幡

○山ぶしのうつ火 夫木抄、十二、秋、源兼昌「かづらきやこかげにひかる稻妻を山ぶしのうつ火かとこそみれ」

○山岡頭巾 萩草頭巾 布子 山岡頭巾と云ふものは、本草頭巾なり。今は此草頭巾と云

名も失せて、たまゝ北越奥羽の間に、ホクソと云

名遣れり。即草頭の轉じたる也。文錄以前、木綿の

乏しかりしほどは、下民みな冬も麻の布に、蘆苞の

○山ぶし 新撰六帖、五、正三位知家卿「こよ

くなし、物也。名義は突遣ものなれば、遣てふ言を

體言に呼ならへるべし。崇神紀に「豐城命以夢

奏天皇。曰下自登御諸山一向東而八廻弄槍八

廻擊刀」古事記、中、神武段に「即握横刀之手上

矛由氣矢刺而追入之時」云々とある矛由氣も、鉢を

突遣をいへるにて、同じ心ばへなり。

○やりど 新撰六帖、五、正三位知家卿「こよ

ひさへことしげしとてあふことをちかへやり、どのた

てながらのみ」源氏物語、東屋「やりどいふもの

さして、いさゝか明たれば」新撰六帖「ちかへやり

穂を入れて服しゆゑに、布子と云名もあるなり。さて其布の苧屑多かりし故に、脚絆にも頭巾にも制ける。是をヲクソとぞいひし。北越の民、山野の寒風に堪ざる故に、常に是を着す。殊に夜行には必ず用ふ。されば古風の晝に、獵師山賊の屬ひ、夜行を専らとする者には、極めて此ヲクソを描く習ひの如くにさへぞなる。さるを此ヲクソ東國にうつりて、山岡の夜行には、便よきまゝに一名此名の起れるなり。此事三莊大夫といふ淨瑠璃の文句に出たり。

○やまととこ 山男 山女 淮南子十三氾論訓「山出嘵陽。水生罔象」注「嘵陽山精也。人形長大面黑色。身有毛。苦反踵。見人而笑。嘵音交」

西遊記にいへる薩摩邊なる山男山女のさまは、これとは異にて、又一の物とは見ゆれども、やゝ似たるやうにもあれば舉つ。

○やみの夜の飛礫 莊子云「今且有^レ人^ニ於此^ニ以^テ隨侯之珠。彈^ハ千仞^ノ之雀。世必笑^ハ之」書言故事云「明月之珠夜光之璧。以投^ハ於道^ニ」又云「謂不^レ遇^ニ識者」明珠暗投^ト

○やもめ 空穂物語、藤原の君、四十九「その

體言に呼ならへるべし。崇神紀に「豐城命以夢奏天皇。曰下自登御諸山一向東而八廻弄槍八廻擊刀」古事記、中、神武段に「即握横刀之手上矛由氣矢刺而追入之時」云々とある矛由氣も、鉢を突遣をいへるにて、同じ心ばへなり。

○やりど 新撰六帖、五、正三位知家卿「こよ

ひさへことしげしとてあふことをちかへやり、どのた

、どのたてるからかみ」江次第、石清水臨時祭、抄
云「於高遺戸下立地給之」

○やる 破 士佐日記の終の詞に「とまれか
くまれとくやりてん」

○やれぐつを棄るが如く 萬葉集七「宇既具都
遠奴伎都流其等久智布比等波伊波紀
欲利奈利提志比等迦」

○やれ（マア） 「あゝ」を見よ。

○やれる 破る也。神樂譜、採物、篠の歌末
「篠筆わけば袖こそやれめ、利根川の石はふむとも

いざかはらより」土佐日記の結詞に「とくやりてん」
などあり。

○治郎 鮑治郎 龍陽 世にはゆる芝居
の役者、かげまなど云者を、やうといふは、野郎

にはあらず。野郎は貴人に對して下郎 治郎也。此治はよ
そふと訓む。周易に、治容誨^ル淫と見ゆる是也。又

古へは、治と蟲と通ふ事あり。左傳に、女の男を
またがへり。此時はこぶる意あり。左傳に、女の男を
まどはするを蟲といふとも見ゆ。されば、蟲惑とも
つけたり。又男色の治郎の事を笑府には龍陽とも

○やんま 「とんぼう」を見よ。

④ノ部

○ゆかむ ゆとり 船中のさし水をゆと云、其ゆ
を取物をゆとりと云。和名抄云「^{ヨドリフナス} 尾治」。蔣飭切韻云。

夙^音和名由^故土利。洩^ス舟中水^{ノラ}之斗也。唐韻云。滄^故
緋^反漢語抄云。屏^ハ布奈由。一云^ニ客水^ノ水和^{スル}物也」と
あり。今按に、これを由と云は、忌の意なるべし。
そはいさかにても船に水のさし入は可^レ忌なれば
也。

○ゆうけん 勇健 後漢書八十鳥桓傳「有勇健
能理決闘訟者。推爲大人。無世業相繼」維摩經十諸
供養品十三「端正勇健。能伏怨敵」法華經五安樂行品
十四「如有勇健。能爲難事。王解醫中明珠賜之」

○ゆかせよ 「ゆける」を見よ。

○ゆかた 今浴衣をゆかたと云は、湯かたびら
の省れる也。相模集「ふくにおはする人のゆかたび
らの袖を、鼠のそこなひたれば」和名抄云「内衣^{ノラ}」
溫室經云。澡浴之法七物其七曰^{ハナツ}内衣^ノ和名由^{カタヒ}加太比
良」論語注云「明人以^シ布爲沐浴衣」

○ゆかみ うたへね「しほがまどもの思ひく
にゆがみたてるを」十六夜日記、長歌「ゆがめるこ
とを又たれかひきなほすべき」枕冊子、十二廿五「よ
うせずばほ、ゆがみもしつべし」

云り。又近世の俚語に、われ美男がほして自ほむる
をば、艶治郎といふといへるも、治と治と字形の相
近きを見たがへたるにて、かの鍛治を鍛治の字と覺
えたる類也。楊升菴外集廿五「治容誨淫」太平廣記引
之。作蟲誨淫」左傳「女惑男曰蟲」^{ト語}蟲女縱欲

張平子西京賦「妖蟲艶夫。夏姬美聲暢子」虞氏南都賦「侍者蟲媚。巾幘鮮明」五臣注「作治媚」馬融廣成頌「古治字作蟲字可證」傳毅舞賦「貌嬈妙以艶今」

紅顏暉其揚華」注「妖蟲淑艶也。或省作蟲。人姓也。詳希姓錄。又三蒼并于寶易注「治銷也。遇熱則流。遇冷則合。與水同志。治字从水。女之艶媚。亦令人銷神流志。故美色曰治也」むかしお國歌舞妓の停られし後、男の若衆歌舞妓となりける比、艶治といふ美少年ありしよしにいへり。さらば其艶治も、艶治と誤りたる也。

○やんま 「とんぼう」を見よ。

○ゆかむ ゆとり 船中のさし水をゆと云、其ゆ
を取物をゆとりと云。和名抄云「^{ヨドリフナス} 尾治」。蔣飭切韻云。

○ゆかわく 堀川院御時百首、中宮權大進仲實
「たゞらたてふけばまがねもわくものを戀にとけせ
ぬ人や何なる」

○ゆかをならぶるちぎり 小鳴口號「是まで參

り候へば、床をならべし契りさらにかはり侍らじ
と仰こと有しに「しらざりきならはぬ山のかげまで
もゆかをならべん契りありとは」

○ゆきあしい 「ゆきよい」を見よ。

○ゆきあふ 今かたゐなかの人、逢と云ことを

ゆきあふといへり。伊勢物語に「在五中將にあはせて
しがなと思ふ心あり。かりしありきけるにいきあひ
て」夫木集、一、春、寂蓮法師「たちかへる年とと
もにや春も又ゆきあふ坂を越て來づらん」
○ゆきけた 藤原爲忠朝臣集「水まさりわたり
も絶しながらなるばしのゆきげたみえの計に」

○ゆきしな 「しな」を見よ。

○ゆぎしやう 湯起請 應神紀に、武内宿禰命を弟甘美内宿禰が讒て奏せしによりて、城川の邊

にて探湯をなさしめ給ふに、武内宿禰命は、身につくがなくて勝給ふ事見ゆ。是世に云探湯起請といふものゝ始也。允恭紀云「沐浴齋戒名盟神探湯云々」

と見ゆ。鐵火を握るも是より起れりといへり。

○雪は豊年の瑞 積、雪謝靈運雪賦云「盈尺則呈瑞於豐年」朱子曰

「雪非能爲豊年。其所以然者。以下其凝結陽氣，任地。至來歲發達而生萬物也」

○ゆきばとけ 雪佛 康賀王母集『おなじひ』上文集ノヒの雪を丈六の佛につくりたてまつりて供養しつるよしいはれて、「かくいにしへのつるの林のみゆきかとおもひきくこそあはれなりけれ」返しほどへて「日をぞへて、雪の佛は消ぬらんそれも薪のつきぬとやみし」夫木集、卅四、釋教「雪にて丈六の佛をつくり奉りて供養すとて」

○ゆきよい ゆきあしい 萬葉集、十五「安乎爾與之奈良能於保知波山吉余家杼。許能山道波山宇治拾遺、八」「ゆきよ」とあるくとあるく

に參つたといふも、擊出たる木太刀の鋒の中りたるにて、則行届たるなれば其意同じ。書紀崇神卷「豊城命以夢辭奏于天皇。曰自登御諸山一向東而八廻弄槍八廻擊刀」とあるも弄槍と訓べきなるべし。

宇治拾遺、八「ゆきよ」とあるく

○ゆすりあげる 神樂譜、早歌「ゆすりあげよ、そりあげん、そりあけよ、ゆすりあげん」

○ゆする そり動搖さするをゆするといふ、神樂、早歌に「ゆすりあげよそりあげんそりあげよゆすりあげん」源氏物語、須磨に「天下ゆすりて」などあり。又そりは、萬葉十七に「天そり高きたち山」又源氏に「格子そりあげよ」などいへり。今世にも、心のそるとも又そりあげて泣などもいへり。猿丸大夫集「しながらどりゐな山ゆすり行水の名のみながれて戀わたるかも」(猶いたぶる)を参照せよ。)

○ゆだち 湯立 康富記「文安六年九月廿九日。粟田口神明有湯立。參詣拜見」萬代神祇、神命を弟甘美内宿禰が讒て奏せしによりて、城川の邊にて探湯をなさしめ給ふに、武内宿禰命は、身につくがなくて勝給ふ事見ゆ。是世に云探湯起請といふものゝ始也。允恭紀云「沐浴齋戒名盟神探湯云々」と見ゆ。鐵火を握るも是より起れりといへり。

○行水に數かく 伎安之可里不利

萬葉集「行水に數かくことくわがいのち妹にあはんとうけびつるがも」古今集、

戀一「行水に數かくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり」拾遺集「かつみつゝかけはなれゆく水の面にかくかずならぬ身をいかにせん」涅槃經

「是身無常念々不住猶如雷光暴雨幼炎亦如盡水隨盡

隨合」

○ゆくく 藤原爲忠朝臣集「ときのまにしぐれはすぎて日は照ぬゆくくほさむまのゝすげがさ」

○ゆける ゆかせよ 田舎にて木匠の詞に「桺をゆかせろ」と云る事あり。ゆかすとは、いかにするをかいふと問たるに、突出せずゆけるといふといへり。されば、ゆかせよは令する詞にて、突出せといふこと也。これに仍て考るに、古事記中卷、兄宇迦斯等を機に進入する時の詞に「矛由氣矢刺而進入時」とある由氣も、ゆかせの約れるにて、矛を突出し、弓に矢をつがひて向ひしをいへる也。劍術の手

樂を、中原師季朝臣「そのかみのたばかりごとに空はれて聲さえのばるゆだちみや人」今世に神社の廣前に、大釜へ煮湯をわかして、禰宜などのまきそぐを、湯立とも御湯上ともいへり、こはもと探湯より出たるにやあらん。探湯の事は、應神紀、允恭紀等に見ゆ。弘仁私記云「坐三甘檀丘」令探湯定真僞大和國高市郡在釜是也」と見ゆ。今も神社の祭に湯立といふわざあり。神樂譜の末に弓立と書るも、湯立の假字なり。ゆゑに其歌に「いせ島やあまのとねらがたくほのけたくほのけいそらが崎にかをりあふ」とあり。是に烟をよみたるも、即湯立の縁也。

○ゆたん 一空穂物語吹上「ゆたおほひたるだいにすゑたる」

○ゆづけ 湯漬 源氏物語、少女「御ゆづけ」くだものなど、だれも「きしめす」空穂物語、云は、ゆたにの音便也。今俗に油断とかくは、音便になれるうへの填字なり。

○ゆだん 油斷 源氏物語、少女「御ゆづけ」せよとの給ふ」湯漬は今民間にて飯に湯をかけて、

ゆづけといふとは異なり。上古は湯の中に飯を漬たるをいふ。宇治拾遺物語に『三條中納言といふ人有くるしきまでに肥たまひければ、くすししげひでをよびて、いみじうふとる、いかせんとの給ひければ、しげひで申やう「冬はゆづけ、夏は水づけにて物をめすべきなり云々』今大路家、湯漬の歌「ゆづけめし夏は食せよ其外はむしけ不食の人々に毒なり」又「ゆづけめしちやう胃の熱をさましつゝ、霍亂を治し毒をけすなり」

○湯桶よみ 「續板」半尻 江次第、四「續紙」江次第「續飯」同
○ゆとう 「ゆ」を見よ。
○ゆぱり 「よつぱり」を見よ。
○ゆひいれ ゆひのふ 納采 結納 古事記、上卷、須世理毘賣命の御歌の次に「如此歌即爲三字岐由比^ニ而宇那賀氣理豆至^テ今鎮坐也」とある、字岐由比は、蓋結にて、女神男神互に御蓋をさし交^シて、今より長に心かはらじと、結固め給ふ也。結標^スなど^テの結にて、事を定め固むる意也。世俗にいはゆる納采の由比是なり。結納とかく字も結納なるを

後に音訓混じて拙くよみつけ來し也。さて今世迄も萬の事を契^シ固^ルしには、益を差交することするは神代よりの風儀なりし事は見て見べし。

○ゆひのふ 「ゆひいれ」を見よ。

○ゆふね 菓花物語、玉臺「ゆふねのゆわかして、そう二三十人あみのゝしる」谷室 和名抄「伽藍具浴室」今昔物語、廿二「京ニ有ケル下衆、北山ニ木伐ニ行テ返ケルニ、鶴ノ原ヲ通ケレバ、湯屋ニ煙ノ立ケレバ、湯ナメリ寄テ行カムト思テ、木ヲ湯屋ノ外ニ置テ入テ見レバ、老タル法師二人湯ニ下リテ浴ス。一人ノ僧ハ腰ニ湯ヲ渡サセテ臥タリ」

○ゆふのみけ 夕御膳 申の刻に夕の御膳まる。侍中群要藏人式云「申二刻供^ニ夕膳。具同ニ朝膳」者今案年來日記以^ニ酉一刻爲^ニ夕膳廻。餘同ニ朝

○ゆふべ 前夜をいへるはめづらし。異本堤中納言物語「夕べよりは御ぞどもゝさわやかにみえて」

○ゆまき 空穂物語、あて宮、春日詣の末に鎧入^スすけのおとゞすやしのうちきゆまきして、ゆどのに參

る」同、藏開「あやのゆまき御ふねのそこにもしき」

○ゆみづをだに 築花物語^{月寒}「ゆみづをだにまゐらで、しづみふし給へる」竹取物語「湯水のまれず。おなじこゝろになげかしかり」

傳燈錄云「僧問弓折箭盡時

如何。師曰去」

○ゆめあはせ 倭姫世記云「泊瀬朝倉宮御宇二

十一年丁巳十月朔。倭姫命夢教覺給天皇太神宮。吾如天之小宮坐^ニ爾。天下豆毛一所耳坐。御饌毛安不^ニ聞。丹波與佐之小見沼之魚井原坐。道主子八乎止女奉^ニ齋御饌都神止由氣皇太神乎。我坐國欲度誨覺給支爾時大若子命差使朝廷御夢之狀乎令言奏。即天皇祥御夢。則天皇今日相夢矣^ニ攝津風土記云「刀我野爾立留真牡鹿母夢相乃麻々爾」

○ゆめがたり 源氏物語、若菜、上「ひかり出ん暁もかくなりにけりけふぞみしよの夢がたりする」同夢浮「あさましかりしよの夢がたりをだに」は實の夢にはあらず夢のやうなるの意なり萬代集、戀二「はかなくも枕さだめすあかすかな夢がたりせし人をまつとて」

○ゆらぐ ゆるす ゆるむ 萬葉集十七七八〇「情爾波由流布許等奈久すがの山すがなくのみや戀わたりなん」此ゆるぶのふをむに轉じていふは、けぶるをけむるといふ類也。綱などを緩むるものと同語にて、夫よりなだめゆるす方にもいひ、又ものゝ延ゆく方にもいひて皆一つ也。

○ゆらる 賴政卿集「子を思ふ鳩の浮巢のゆられきて捨じとすれや水隱もせぬ」

○ゆりよする 山家集「波にやどる月をみぎはにゆりよせてかゝみにかくる住よしのきし」

○ゆるか 俗には、ゆるやか、ゆるらかなどいふことを、ゆるかにといふことあり。それもひが事ならじ。夫木集、一、春、百首歌、懸富門院太輔「真木の戸を明れば春やいそぐらん袂にさえし風ゆるかなり」

○ゆるぎげ 賴政卿集「いとはるゝ我みぎはにははなれ石のかゝる涙にゆるぎげぞなき」

○ゆるぐ 夫木抄、廿二、雜、他阿上人「かけしづむふじの高ねは下に見えてなみのゆるげばうきしまが原」

○ゆるす 繢日本紀、宣命に「ゆるじたまひ、なだめ給ひ」萬葉集十一丁十三「梓弓引てゆるさす云云」十二丁「思ひみだれてゆるしつるかも」十一丁「人のゆるさんことをしそおもふ」十三丁十八「心はゆるす君がまに」（猶「ゆらぐ」を參照せよ。）

○ゆるみ 萬葉集十七丁四十「心にはゆるぶことなく」

○ゆるむ 「ゆらぐ」を見よ。

○ゆるめる 萬葉集、十七に「こゝろには、山流布許等奈久」とある。此ゆるぶを、ゆるめ、ゆるむるともいふを、めるといふは俗言なる也。此言ゆるむの條にいへり。

○ゆるごん 空穂物語、只こそ「ふたりとなき子なれば、いかゞらうたくおもはざらん。ましてかのゆゑどんをおもへば」

よノ部

○よありき 菊花物語、鳥邊野「うちばへ御よありきのおそしきを」同「御よありきのしるしにやいみじうわづらはせ給ひて」

○ようさり 「よさり」を見よ。

○ようすい 用意 明月記「文暦二年十二月廿二日。今朝武士已而了爲用意手分」

○ようしや 用捨 白氏文集に「若達」命執迷則罔有ニ容捨」とある、是今云用捨と、もはら同意なり。此字なるべし。用字をかくは、用ふると捨るといふ用捨と混ひつるにこそ。

○よう 用 御用 急用 要用 用事 入用 用立

「又朋そ之中頗有三要須之人。適依レ有ノ用。入在籠中」更科日記に「さるべきよう有て、秋ごろ和泉にくだるに云々」是らは、もはら今云用ある也。後撰集、雜二に枇杷左大臣「よう侍りて桔の葉をもとめ侍ければ云々」赤染衛門集に「つかふべきよう有て、くれをこひたりしに云々」これらは、もちふべき事有てといふ意なれば、用字にあたれり。台記に「依レ有ニ急要退下宿廬」これは要字はかゝれたれど、今の世にいふ急用なり。此外ふようなどもいひ今昔物語、宇治拾遺、平家物語等にいたりては、御用とも急用とも、用事などもいへる事見ゆ。

○よけい 私 物の多き事をよけいといひて

それに餘慶の字を填つれど、これも元は古語なるを訛れる也。常陸の筑波の人此よけいといふことをよかといへるに合せ考ふれば、古今集、壬生忠岑長歌に「私のおいのかずさへやよければ」とよめる、

○用心は臆病にせよ 頼朝賜三佐々木定綱 狩云

「ふるきものがたりに云傳へたるは、多田攝津守殿のもとに、四天王とてきこえたるをのこ共の中に、公時といふは、おのづから智ありて宗としける。綱といふは、新參にてあるが、公時に心の剛に成やうをし、よといひければ、公時が返答に、心の剛をならんとおもはゞ、臆病をならへといひければ、綱むねをひらきけり。此事をよくくともひつゝれば、いみじき才學にてあるなり。からずしも、臆病になれとはをしへもせず。心ながく案じはからへと、用心をよくせよといへるこゝろ也。たゞうちある事だにも、大事をおもひはからひたるものは、物とがめせず。事にならぬ事ば事になさじといふぞかし」新續古今集、佛國禪師うたに「折えても心ゆるすな山ざくらさけぶあらしの有もこそすれ」是用心をよくせよといふこゝろなり。

○用水 「あくと」を見よ。

○よがたり 世談 菊花物語、月宴「よがた鑑類。手斧の類に今よきといふ物あり

○よけい 私 物の多き事をよけいといひて

それに餘慶の字を填つれど、これも元は古語なるを訛れる也。常陸の筑波の人此よけいといふことをよかといへるに合せ考ふれば、古今集、壬生忠岑長歌に「私のおいのかずさへやよければ」とよめる、

○よけい 私 物の多き事をよけいといひて

それに餘慶の字を填つれど、これも元は古語なるを訛れる也。常陸の筑波の人此よけいといふことをよかといへるに合せ考ふれば、古今集、壬生忠岑長歌に「私のおいのかずさへやよければ」とよめる、

○よけい 私 物の多き事をよけいといひて

それに餘慶の字を填つれど、これも元は古語なるを訛れる也。常陸の筑波の人此よけいといふことをよかといへるに合せ考ふれば、古今集、壬生忠岑長歌に「私のおいのかずさへやよければ」とよめる、

此やよければを、よかきと活していひならへる言なるべし。

○よこあめ 夫木抄、十九、雜、信實朝臣「まどうつも風にしたがふ横雨のといくたびかふりすさぶらん」建保八年百首歌合、左近中將具氏「ゆふだちの影は過ゆくよこ雨にこすのまみれば露ぞかれり」

○よこ紙さくがごとし 源平盛衰記云「大臣のうせ給ひぬるは、平家の運つきたるのみにあらず。爲世爲人にもあしかるべし。清盛入道の横紙を破給ふをも、なだめられしかはこそ。かくしても有つるに」とあり。

○よこせ 人の持たる物を、それよこせといふは、遣せを讃れる也。俗言には、横韵通へる言多かり。遣字は此より彼へやるをば、夜留ともつかはすともいひ、彼より此へ來らしむるをば、於許須といへり。又今之俗文に、申越など云も、越は於許須の於を省ける言なるを、越字の義と心得て、此より彼へいひやるをも申越といふはひが事也。萬葉集十八二十に「しら玉のいほつつどひを手にむすび四子に「しら玉のいほつつどひを手にむすび

「紅の八しほに染て於己勢多流衣のすそも云々」於許世牟安麻波、牟賀思久母安流香」十九十二に卿爲家「あとたれてまもるとならば玉津嶋よこなみたつなわかのうらかせ」

○よこのぼう 「ぼう」を見よ。

○よこばしる 横走 夫木集、源仲正歌「よこばしる葦間のかにの雪ふればあなさむげにやいそぎかくる」

○よこぶり 夫木抄、十六、冬、信實朝臣「風わたるみねの木のまのよこしごれもる山よりもした葉そむらん」

○よこめ 横目 濱松、三「よこめなくありつき給ひにたると聞に」ヨク心ナダメクマサ夫木集、廿一、杣、清輔朝臣「杉樽をひく杣人はあまたあれど君よりほかによこめやはする」

○よさり ようさり 夜也。竹取物語「御衣ぬきてかづけ給ひつ。さらによさり此つかさにまうでこと、のたまふてつかはしつ」落窓物語、一の上「夜さりは三日の夜なれば云々」今俗に夜を、よさ

りとも、ようさりとも云は古言也。催馬樂刺縞歌に「安之太爾止利。與宇左利止利」とあり。

○よさん 豫參 預參 同 明衡往來「今朝頭中將被投消息。仍可豫參也。如命先可參幕下令相待給耳」後漢書六十八蔡倫傳「建初中爲小黃門。及和帝卽位。轉中常侍。預參帷幄」豫參は、あらかじめまるるにはあらず。參者の人數に預る意也。

○よしなき 俗に、ヨウデモナイと云意。拾遺、員外「年をへてよしなき秋のくれにて紅葉の色のうらめしきかな」濱松「人よしなきやうに侍れども必御心にいれたづね聞え給ひて」

○よそへ

萬葉集八十五「君がりやらばよそへけんかも」又「さかぬが代にそへてだになん」十九十四

○よたか 夜鷹

さうか 遊女 夫木抄

廿七、雜、後九條内大臣「かりくらすかたの、みの秋かせに夜たかつなぎて月やみるらん」夜發の尤賤者を江戸にて、よたかといふは、夜鷹の侍、夕て求食に出るに譬へ云言と聞ゆ。和名抄に「恵鷗」漢語抄云「興多加晝伏夜行。鳴以爲恵者也」とあるに見てよく似たり。京大坂にて、さうかといふは、惣嫁の意歟。さては遊女の凡ての者皆然るなれば、此名よしなし。又是を辻君と云は、歌などによまんとて、うるはしくいひなしたる也。江戸にて辻君をよたかといふは、夜鷹といふ鷹の、鷲の鳥をたづねもとめて捕りくふかたより比したる歟。

○よつぱり おまる やぱり ぱり 古事記傳曰「尿」書紀に「尾此云愈廢理」和名抄に「尿小便也。由波利」とあり。由は湯、麻理は尿麻理の麻理に同くて、其出るを云。俗に遺尿をよつぱりといふは、夜尿なり。又馬の小便をぱりと云」とあり

今按に、尿をとる桶をおまるといふも、まる物なれ

ば名となれる也。又其まるばるとも云は、はとまと常に音通ふ故也は、屁をひるといふと同じくて、其出る貌息を張くなるよりいふ也。

○よつびて 夜ひと夜といふを急語にいひつめたる也。土佐日記「十二月廿五日、日ひとつ夜ひとつかくあそぶやうにて、あけにけり」伊勢物語に「夜ひとよさけのみしてあそびて云々」

○よつもの 空穂物語、俊藍下「いみじういかめしきすぎの木の、よつものをあはせたるやうにてたてるが、大きなる屋のほどにあきあひてあるを見て」

○四ツ物成 北條五代記卷四「聞しは昔北條早雲入道氏茂伊豆國を切て取事品少し。變りし説多し。或老士語りけるは、早雲は民百姓を憐愍し、慈悲深き故に、伊豆國を治められたり。云々。一人も残らず伊豆の侍新九郎被官に候す。三十日の中に伊豆一國治りぬ。新九郎收納する所は、御所の知行侍がある計を、臺所領に納め、皆本の侍領知するうへ新九郎高札を立る。前々の侍年貢過分の故、百姓つかる、よし聞及びぬ。以來は、年貢五ツ取所をば一つゆる

のおほやけの御はじめも、此制にしたがはせ給へるは、たふとくかたじけなき事なるを、近年又國によりては、八九にも至るありとか。あはれむべき事なり。

○よのかため 菊花物語、楚王夢「世のかためにておはしませば」同、根合「かくさまぐ」とめでたく世のかためとならせ給ふべき一の人たち」

○よのめさのめ あさめよく 故阿佐米余玖汝取持「云々」傳云「師記に『旦目吉也後世人も朝に吉物を見れば、朝目吉とて悦ぶめり。又田舎人の夜の目佐の目も合せずと云なるは、夜目朝目をも合せずと云語なり」と云はれし、此意也。朝に起出て此刀のある見るは、朝目の吉きなり」とあり。今按に、雨やさめといへる詞と合せて考へるに、夜の目さのめは、夜の目眞夜の目を重て云なるべし。

○よばひばし 夜遙星 夫木抄、十九、雜爲忠朝臣「うらやましたれをみ空のよばひ星くるればいで、ひかりしるらん」和名抄云「流星。兼名苑云流星。一名奔星和名與八比保之」

し、四ツ地頭へ納むべし。此外一錢にあたる儀なりとも、公役懸べからず。若法度を背く輩あらば、百姓等申出べし。地頭職を取はなさるべき者也」と。

今案に、こは應仁記上「亂前御晴繁事如此面々名を惜み諸家を耻て、粧ひをのみ刷ろはんと奔走せしましらる。是を以て諸國士民百姓等に課役をかけ、たらん錢棟別を色々の様を替て譴責すれば、國々の名主百姓は、耕作をしえず。田畠を捨て乞食し、足手に任せて問行依之。万邦の郷里村縣は大平郊原と成にけり。嗚呼淺ましきや、鹿苑院殿の御時は倉役四季に懸りけん。普廣院殿の代と成て、倉役一年に十二箇度になされけん。然るを當義政將軍の御代となりて、くらやくの臨時しげくかゝりしかば、大嘗會のありし霜月には、臨時九ヶ度臘月に八ヶ度也。又彼借錢を破らんとて、前代未聞の德政といふ事を云出して、此御代に十三ヶ度まで行はれければ、倉方も地下も皆絶果て云々」此以前も、亂國のほどは此有さまなりけるを、右の如くに仁政をくはへられたるなり。是よりして、此四ツ物成東國の例となりて、今

○よびかへせ 夫木抄、十五、秋、惠慶法師のこりなくみねのもみぢも散にけり秋よびかへせ山の山びこ

○よひま 夜間 保憲女集「冬河の波のよひまにこほれるを風もておれるあやかとぞみる」同秋かせのさむきよひまに荻のはにそゝのかされて人ぞ戀しき」

○よばれてゆく 土佐日記「十二月廿五日、かみの館よりよびにふみもて來れり。よばれていきて云々」

○よぶね 夜舟 萬葉集六丁に「夜舟こぎ」とよみ、また七十五丁などにも見ゆ。

○よみくち 歌の詠風調。落書露顯序「いづれの歌、いづれのよみくち世に残りおはして」長明無名抄、上「させる重代にもあらず。よみくちにもあらず」同「今はよみくちおくれになり給へり」

○黄泉路返 黄路障 古事記上「追往黄泉國萬葉集、九三丁に「遠津國黄泉乃界丹」又六丁「安串呂黄泉爾將侍跡」源氏、夕霧卷に「よみくちのいそぎ」菊花物語、音樂卷に「よみづとに侍ら

ん云々」凡て死で魂の幽冥にかかるを、夜見へゆくといひならひたれば、よみかくるといふは、即生かへる也。黄泉の隣りなどいふもたら後生のさはりといはんが如し。

○よみちのさはり

「よみぢかへり」を見よ。

○よみはたらかす 夫木抄、十二、秋、信實朝臣「水ぐきのをかのみなとにとぶ雁をよみはたらかすふみかとぞみる」

○よむ 數ふる事を讀むといふは、古言のまゝ也。萬葉集四十六に「月日乎數而」又七十九に「浪不數爲而」又十一二十に「時守之打鳴鼓數見者」又十三十五に「吾睡夜等呼讀文將敢鳴」又卅「吾寢夜等者數物不敢鳴」又十七三十に「月日餘美都追」古今集にも「濱の眞砂はよみつくすとも」など猶多かり。文字を讀むも其義理を服し、行を運びゆくなれば、遂に同意也。同集小町の歌に「行水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり」とよみたる數かくといふ語の釋、昔より未定かなるをきかず。今案には、右の數といふ心ばへもて字かく事をば數かくとはいへる也。

○よみぢかへり

「よみぢかへり」を見よ。

○よみはたらかす 夫木抄、十二、秋、信實朝臣「水ぐきのをかのみなとにとぶ雁をよみはたらかすふみかとぞみる」

○よめ 夜目 夫木抄、十八、冬、和泉式部

「天のはらかきくらがりてふる雪をよめにはあかき月かとぞみる」清慎公集「てばかりかこひもやすらんよめにてもしるきは人のこゝろとぞみし」和泉式部集「天の原かきくらがりてふる雪をよめにはあかき月かとぞみる」葵花物語、こまくらべ「女房のなり袖口夜めもしるく」

○よめのこの小鼠 夫木抄、廿七、雜、法成寺入道關白「よめのこのこねずみいかなりぬらんあなたうつくしとおもほゆるかな」御かへし事「君にかくよめのことだにしらるればこのこねずみのつみか

ろきかな

○よも 四方

夫木抄、十六、冬、左近中將真氏卿「今日よりはよものやしろの神無月いづくにたびのみしめひくらん」

○よも云々 よもさやうな事あらじ。又よもや

とおもふだに、又よもやにかゝりてなどいふ。此よ

もの詞、雅語にも古くより見えた。和泉式部日記四月四丁「月さし出ぬ。いとあかし。ふるめかしうお

くまりたる身なれば、かゝるところなどには居なら

はぬを、いとはしたなきこゝちもするかな。そのお

はする所にすゑ給へ。よもさきぐ見給ふらん人のやうにはあらじとのたまへば」

○よもぎのあと 炎痕 隆信集、巻六「れい

ならぬこと有て、やいとうなどしたるに、又この女

もひるくふよしをきて「朝霧のひるまはいつぞ秋

風によるぎのあとも思ひみだれぬ」返し「みだるら

んよもぎの跡のくるしさに露のひるまもいつとしら

れす」夫木集、廿八、爲家「春またぬ冬がれのみも

何としてふるきよもぎの跡をやくらん」千五百番、

寂遠法師「みにつまる風のかよひち尋ねすばよもぎ

かせきをいかでするまし」今物語云「大輔入道ときこえし歌よみ中略風のけ有て灸治しけるに、人のとぶらひて侍ける返事に「年へたるかせのかよひち尋ねずば蓬が闇をいかゞすゑまし」

○よもや 保憲女集「なみならばよもやまことに吹かへす雲のいはりぞいかゞしつらん」

○よもやま 四方人表 四方山 清輔集「女

のもとにゆきてかたらひけるに、よもやまにたのめ

けれど」葵花物語、花山「よもやまの人」清輔集「よ

も山に花まつほどの白雲は」袖中、四十八「よもやま

のことをかきつけたることあり」葵花物語、もりの

しづく「よもやまの」同珠「よもやまのほとけ神を

たづねて」二條天皇大后宮大貳集「たとふべきかた

なき物はよもやまを霞こめたる春のあけばの」拾遺

神樂「よもやまの人のたからとする弓を神のみまへにけふたてまつる」和泉式部集、夕ぐれの鹿の聲「よ

もやまのしげきをみればかなしくて鹿なきぬべき秋の夕ぐれ」是れ四方山ノ意ニ用。今も、よも山の物語な

ど常に云ことなり。但し今云なるは、四方八面の轉じたる歟。葵花なるもしか聞えたり。神樂譜、弓、よ

も、山の人の中よりとする弓を神のたからに今しつるかな」又鉢「四方山の人の守りにするほこを」

○四方山の物語 四方山のものがたり、よも山の人などいふ事も古きよりいふ詞歟。拾遺集、神樂歌に「よも山の人たからにする弓を神のみまへにけふたてまつる」

○よゝとなく 権中納言兼輔集「五月雨のよ、となきつるほとゝぎす袖のひるまもなきぞかなしき」

○より 時々のよりに同じく、二より三よりは二しきり、三しきりなどいふにちかきか。鷹のことなりともよめり。萬代集、冬、中務「とふ人もなき山里のむらしぐれふたよりみよりおどろかすかな」千載、誹諧、橋俊綱朝臣「ともし、てはこねの山にあけにけりふたよりみよりあふとせしまに」信明集「あけてみしかげめづらしきますか、みふたよりみより音こそなかるれ」

○よりあはせる 夫木抄、十四、秋、花山院「下露やむすばるらんむしのねのよりあはせててもわぶるおとかな」

づをして、よるをひるに參り給ひ」大和物語「よるともいはずひるともいはずにげていにけり」空穂物語吹上「よるをひるになしてなんいそぎまうでこし」讃岐日記「夜をひるになして物の聞えぬまでいそぐめれば」

○よろこびがらす 「からず鳴のわろき」を見よ。

○よろしく 佳 愈 千載集、雜中「やま

ひありて東山なる所に侍りけるをよろしくなりて後云々」山家集、下、廿二「風わづらひて云々よろしくなりなば」濱松、三「よろしやかなる御さまならば」

○よろばふ 神代紀下に「就其樹下」徒倚彷徨「仁德紀十四、大御歌爾云々豫呂朋譬喻玖伽茂うらぐはの木」催馬樂「酒飯にさけをたうべてたべゑうて云々なよろばひそ」空穂物語、樓上、下二、源氏物語、夕顔其外多し。

○よわるけしき 夫木抄、冊三、雜、道因法師「みやきひくねりそのつなのも、がらみよわるけしきもみえぬ君かな」

○夜を日につぐ 夜繼日

竹取物語 中納言

○よりあひ 「こぶしん」を見よ。

○よりかゝる 賴政卿集「よりかゝる色もあれ

て薺かやのみだれもしらす打臥にける」

○よりつく 紀貫之集「またはなほよりつかす

とも玉のをのたえとたえてはわびしかりける」拾遺

集、雜賀「夏はあふき冬は火をけに身をなしてつれ

なきひとによりもつかばや」

○よる 古今集、誹諧、みつね「せみの羽のひとへにうすき夏ごろもなればよりなん物にやはあらぬ」

○よるよなか 桜花物語、筆の月「御くだものしわざにや、となりよりくゆりかゝるけぶりいとむづかしきにはひなれば、夜の宿なまぐさしといひける人の言葉も思ひ出らる」文集「縛戎人夜臥腥噪汚床席」

○よるよなか 桜花物語、筆の月「御くだものたびごとに、よるよなかわかすたてまつらせ給ふ」
○よるをひるにいそぐ 桜花物語、さまくのよろこび「よるをひるにいそがせ給ふ」竹取物語「よるをひるになじてとらしめ給ふ」子安貞ナリ 住吉「よろ

○よろこび給ひて云々、をのこどもの中にまじりて、よるをひるになじてとらしめ給ふ」孟子云「仰而思之、夜以繼日」
○よんべ 夜經を音便に云也。土佐日記「十二月廿二日よんべのとまりより、ことじまりをおひてぞゆく」又「よんべのうなゐもがな」

わノ部

附らるノ部

○ろくたい 「かまと」を見よ。
○らんか 「けんだい」を見よ。
○らんこ 「かひおほひ」を見よ。

○わうばんふるまひ 埃飯振舞 俗に、わうばん振舞といふは、椀飯振舞也。椀をわうといふも音便の轉なり。是は殊に下もはね字なる故に、上をわうと引也。田舎にては、正月始ての饗をもはらわうばんといひならへり。明月記「文暦二年十一月八日未時、治部卿來。日吉使毎度例。府舞人陪從一具。近衛召人一具。送椀飯。參座主宮中此事。可相訪由被仰云々」應仁記上「今も程なく、末の松山と成て